

## Special Interview With Geddy Lee and Alex Lifeson/RUSH

レコード・デビューから丸10年、12枚のアルバムを発表して、やっとラッシュは日本にやってきた。ラッシュのフリークたちにとって、この日はどれだけ待たれていただろうか。

仕事柄、世界的なスーパースターたちにインタビュー出来るのも珍しくない。でも初対面の、歴史のある、しかも自分の思い入れのあるアーティストに会う時は、やっぱり緊張する。日本公演スタートの前日、穏やかな陽

の光りがさじこむ東京のホテルで、ラッシュのゲディ・リーとアレックス・ライフソンに会った。陽の光と同じ位穏やかな人たちだった。さすがカナダ人！ ナイス・ビーブルだ。

ミュージック・ライフを渡したら、ふたりが昔よく見ていたといったので驚かされた。学校の同じクラスにカナダにやってきた日本人がいて、よく持ってきて見せてくれたのだという。「記事は読めなかったけれど、写真

とうとうやってきたラッシュ、まさにプログレッシヴ・ハード・ロック・バンドと形容するにふさわしい硬派ロックを、僕たちはこの目で見ることができた。惜しくもニール・パートには会えなかったが、意外と健康的な一面もうかがえる素顔のインタビューとなった。早くも再来日が待ち遠しい！



念願成就初来日 ラッシュ

すばらうーっコンサートをありがとうがうーっ

インタビューと文●大森庸雄  
by Tsuneo O'mori

pix: Gutchie Kojima / Music Life



が最高だったね」とアレックス。リラックスしてきたところでインタビュー開始。

—このところラッシュのサウンドが以前に比べるとシンプルになってきているように思うのですが？

ゲディ・リー：ある部分シンプルにしようとしている。単純化の方向に向かっている。でもぼくらはいつも曲に対して、外面的にはよりシンプルな組立てと内側に隠された複雑な構成をやろうとしてきている。でもまだやりとげてはいないんだ。「グレイス・アンダー・プレッシャー」でもゴールじゃない。

—音楽的方向性は変えているんですか？

ゲディ：レコードを出すたびにね。「シグナルス」ではより量感のあるサウンドを狙っていた。3人編成で4人編成のサウンドを出そうということだ。「グレイス・アンダー・プレッシャー」では、よりコンテポラリーなリズムの組み立てを意識していた。「シグナルス」ではまだ満足出来なかったギターにも大きな役割を与えている。

—長年一緒にやってきたテリー・ブラウンからピーター・ヘンダーソンにプロデューサーを変えたのもそういう理由からですか？

ゲディ：そうだね。

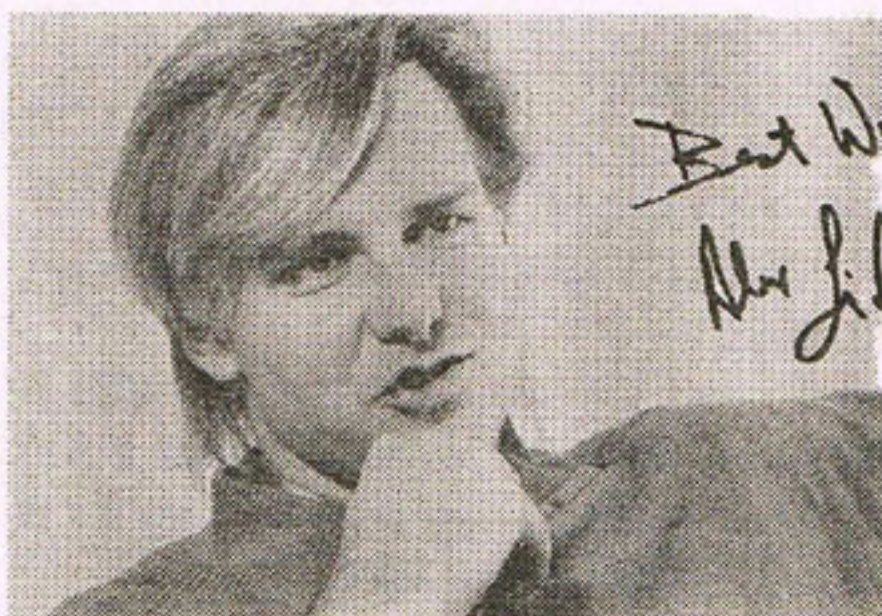
アレックス・ライフソン：テリーとはお互い判りすぎてしまったんだ。テリーが何を言うか、何をすることも判ってしまったし、仕事がイージーになりすぎてきた。ぼくらは変化を求めたし、他の人間と仕事をしたいと思った。

ゲディ：テリーとはあまりに親密になりすぎたからね。彼はもうプロデューサーじゃなかった。バンドの一部になってしまった。

—どうしてピーター・ヘンダーソンに決めたのですか？

ゲディ：これが大変だった。イギリスでかなりの数のプロデューサーに会ったんだ。最初あるプロデューサーに決めていた。でも彼が他のプロジェクトにもどらなくてはいけなくて。ぼくらはまた違うプロデューサーを見つけなくてはいけなくなった。ぼくらが知らない人たちにもかなり会った。でもそうこうしている内にアルバムに入る作品の方が書きあげられてしまった。そこでエンジニアとしていい、しかもこれまでと違うタイプの人を探そうということになり、ピーター・ヘンダーソンに決まった。以前彼はスーパートランプをプロデュースしている。ラッシュのサウンドとは違ふし、考えられない組み合わせだけれど、彼のアイデアについても話しあい、やってみることになった。

—自分たちだけでプロデュースしてしまう気はなかつ



▲普段はスポーツマンのアレックス・ライフソン

たんですか？

ゲディ：難しいことじゃない。でもより良いアルバムを作ろうとしたら困難だ。自分たちだけでは、学ぶことが少なくなるだろう。だから何かを教えてくれて、学べる誰かと仕事をした方がいい。ぼくらの曲を違った見方で見つめ、アイデアを与えてくれる人が必要なんだ。

—アルバムを作る時、最初にコンセプトを決めて作るんですか？

ゲディ：そうでもない。ただ詞に関しては、ニールの頭の中にあるかもしれない。でも最初はバラバラになっている。アレックスとぼくにしてもサウンドチェックやジャム・セッションからそれを次第に組み立てていくんだ。ニールにしても同じだと思う。1年位ノートに書いていくんだね。そしてお互いに意見を出しあって、アイデアからコンセプトをまとめていく。

—「グレイス・アンダー・プレッシャー」で特に気に入っている曲は何ですか？

ゲディ：“彼方なる叡智が教えるもの” “内なる敵へ” それに“レッド・セクターA”がベスト・ソングだ。



好評発売中!  
森 岳史、福田真己:共著  
定価980円

発行 ミニコー・ミュージック

ロック・ミュージック  
スーパー!ロック・ギタリスト

リッチー・ブラックモア、マイケル・シエンカー、ゲイリー・ムーア……。彼ら世界をまたにかけるスーパー・ギタリストたちがいったいどのような環境で育ち、どのように音楽と出会い、そしてどのようにして、独自の確固たるギター・スタイルを打ち出したのか? 本書はジミ・ヘンドリックスから、イングヴェイ・マルムステーンに至るまで、時代を超えて世界のロック・シーンで活躍したギタリスト50人の全貌を明らかにします。



アレックス：“ボディ・エレクトリック”と“レッド・セクターA”だね。

——ラッシュにとって詞はとても重要ですか？

ゲディ：そうだね。

——でも日本のように英語国じゃない国で、英語が判らない場合は？

ゲディ：それでもいいんだ。ぼくにしてもまず音楽から聴くからね。音楽的に気に入ったら詞の方に目をむける。音楽が一番重要だし、いい曲というのはいい詞にはね返るし、いい詞は音楽にはね返る。



◀キング・サニー・アデも聴くというゲディ・リー

——ラッシュがヘヴィ・メタル・バンドとしてとらえられるのはどう思いますか？

ゲディ：まずぼくらがヘヴィ・メタルのバンドだったということがあると思うね。それにみんな分野わけしたがるし。でもラッシュをひとつのカテゴリーに入れるのは難しい。ぼくらはハードに演奏するし、ヘヴィ・エッジな要素を入れるけれど、ヘヴィ・メタルだという以上のものがあると思ってる。どちらかといえば、プログレッシヴ・ハード・ロック・バンドだと言った方がいい。

アレックス：最初はヘヴィ・メタル・バンドだったけれど今あるヘヴィ・メタル・バンドみたいじゃなかった。今のはどれも同じだろう。彼らにとって音楽はあまり重要じゃない。キッスみたいなイメージ・バンドばかりさ。

### RUSHコンサート 演奏曲目

(11月21日 於：東京、日本武道館)

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1. ザ・スピリット・オブ・レイディオ | 9. 赤いパーチェッタ        |
| 2. サブディビジョンズ        | 10. 彼方なる叡智が教えるもの   |
| 3. ボディ・エレクトリック      | 11. クローサー・トゥ・ザ・ハート |
| 4. 内なる敵へ            | 12. YYZ〜ドラム・ソロ     |
| 5. 恐怖兵器             | 13. トム・ソーヤー        |
| 6. 魔女狩り             | (アンコール)            |
| 7. ニュー・ワールド・マン      | 14. ヴァイタル・サインズ     |
| 8. ビトウィン・ザ・ホイールズ    | 15. ロックン・ロール・メドレー  |

(と、MLの表紙のW. A. S. P.を指さす)

——オフはどうやって過ごしていますか？

アレックス：普通の人と同じさ。家族もいるし。

ゲディ：子供たちもいるし。今興味があるのはスポーツだね。ぼくは大の野球ファンだし、テニスもやるし。ニールは自転車に乗ったり、野球をしたり、アレックスは飛行機のライセンスを持っている。

——ずいぶん健康的ですね。

アレックス：前はそうでもなかったからね。(笑)

ゲディ：緊張感をとぎほぐしてくれて、エネルギーを蓄えるのいいんだ。

——レコードはよく聴きますか？

ゲディ：この前聴いたのはキング・サニー・アデ。

アレックス：ずうっと気に入っているのは、シンプル・マインズの「黄金伝説」だね。「スパークル・イン・ザ・レイン」もいいけれど、「黄金伝説」は、最初から最後まで好きだね。

ゲディ：ただ最近のロックのレコードを聴いていて気になるのはレコードが非常に技術に走りすぎていることだ。リンドラムとかフェアライトとかのおもちゃを使って、ただボタンを押すだけとか。作曲という点から見て最近、かなり弱くなっていると思う。ロック・ミュージックにとって重要なのは曲なんだ。テクノロジーは確かに重要だよ。でも技術にばかり走って、音楽不在なのは、首をかしげるね。

——シンプル・マインズをプロデュースしているスティーヴ・リリーホワイトはどう思いますか？

ゲディ：ぼくらと一緒にレコードを作ろうとしたプロデューサーが彼なんだ。

アレックス：でもシンプル・マインズの「スパークル・〜」をやらなければいけなくなって、実現しなかった。

ゲディ：音作りについて、彼は際立った特徴を持っている。ビッグ・カントリーのデビュー・アルバムにしても、U2にしてもね。

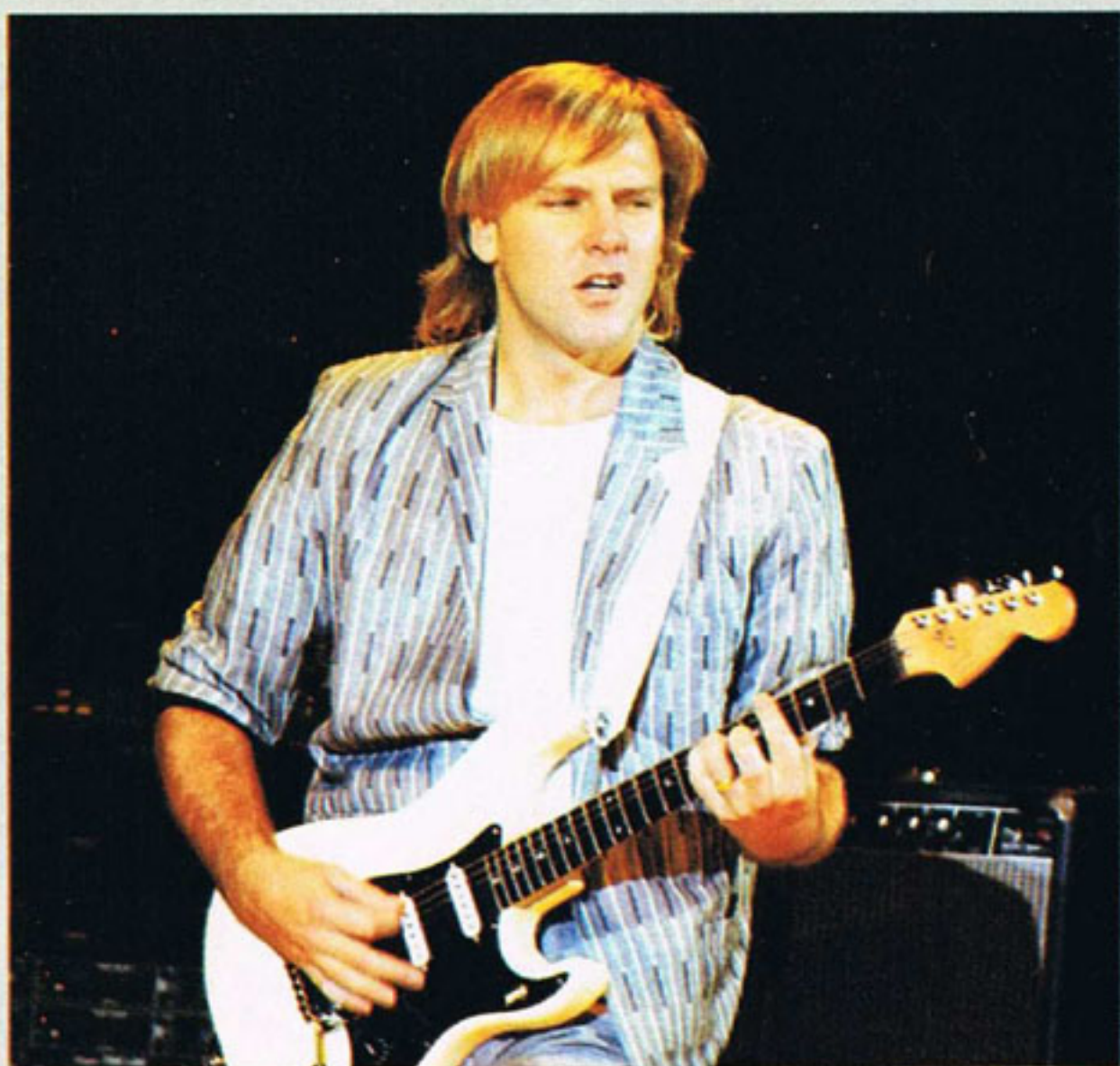
——最後に今後の予定を教えてください。

アレックス：日本公演のあと、ハワイでコンサートをして、カナダに帰る。2カ月の休みをとる。

ゲディ：といってもその休みの間に、新しいプロデューサーを探さなくちゃいけない。ピーターとの仕事はハッピーだったけれど、ぼくらは前進しなくちゃいけないからね。出来るだけ色んな人たちに会うつもりだ。そして2月にニュー・アルバムの作品づくりに入る。

アレックス：すべてがうまくいけば、4月、5月、6月とレコーディングして、9月には次のレコードを出したいね。





アレックス・ライフソン(g)

# r u s h

ラッシュ

3人のテクニシャンがくり出すサウンドは、ポップ&プログレッシヴ。力技と引き技を心得たプロフェッショナルなステージに、ボク達はただ酔いしれるだけ…。



ニール・パート(ds)

(11月21日 於■東京・日本武道館)  
pix:Gutchie Kojima/music life





ゲティ・リー(vo.b)



イングヴェイ・マルムスティーン  
(ライジング・フォース)

# YNGWIE MALMSTEEN (RISING FORCE)

pic: Kohdai Miura

HAPPY NEW YEAR  
TO ALL THE READERS  
OF MUSIC LIFE

*Yngwie Malmsteen*

RISING  
FORCE 1985



To Music Life  
and all our Japanese friends  
dewa mita michi koto

*[Signature]*

*[Signature]*

*[Signature]*



ラッシュ  
**RUSH**